

揺るぎない梅沢良三ワールド

朝倉幸子 TH-1

illustration: 向井一貞

■ 誰かと同じ道は歩まず

デザイン性の高いラフな黒のスーツに、深い赤のタートル。笑顔の先生の着こなしは、コールテン鋼にマッチした色合い。ドタキャンに「風邪は休むにかぎります。十分な休養を。春はそこまで来ております」と、簡潔で温かいメールが。気後れせず「IRONY SPACE」を訪問できました。

「デザインという世界も、構造あってでしょ」。丹下、坪井建築の際立ってわかりやすい表現に触れて、骨格あっての意匠と確信した。「基礎をつくる、魅力的な分野なのです」と言い切る。

坪井善勝先生の紹介で木村俊彦事務所に即採用となったのは、「アトリエ事務所を選ぶなんて者はいなかったからですよ」。そして後悔はない。「構造家になったのは、性格が影響した」とも自己分析。小さい頃から、「役には立つけれど表には出ない」性格は変わらないから、今も名誉職をお断りする。が、「実はその時間を、つくる方にまわりたいからデ」と本音を。結果、つくり手として目立っておられます。

■ 人として

「必ずしも好きなことではない」と意外な答えが返ってくる。「仕事というのは、きちんと毎日、自分の成すべきことを続けるのが大事で大切なことなのです。やりたいからやるのとは違う。やらなければならないからやっているのです。ボクはね、この仕事をいつ辞めてもよいと思っている」。な、なんと？「ムコウから来なくなったら、しがみつかない。望まれないことはヤラナイほうがいいよ〜。仕事に来るし、若い人たちに伝えることもある。自分の構造の考え方を良しとして仕事きて、世の中の評価があるから続けているのです」。甘い自分に、禅問答をいただいて、衿が正された思いなのでした。「日本人はいつまでもやっているからねえ」。はあっつ。

■ 経営者としても

「リーマンショック後5年間できなかつたけど……、昨年やっと、所員全員を引き連れてシカゴとニューヨークに研修旅行に行ってきた」と微笑まれる。なんとそれまでは、毎年実践していたという！

IRONY SPACEでの所員さんたちは、快適な空間でのびのびと仕事をされている。創業以来、一度も全体会議はしたことがないこととも関係があるのかな。共同作業ではなく、個々のプロジェクトは先生と担当者のみが打合せをして進める。「事務所にいたときに駄目な人は、辞めてからも駄目ですよ。ハハハ」。お金と人を仕切ることのできる、一流の経営者ならではの洞察力です。

アメリカがパワーのあった時代につくられた建物を、若いエンジニアが見ることは今でも勉強になります。ただ、日本人にとって30年前には憧れだった海外が、今は違う。先生に目標や好きなエンジニアがいないのは、「ウチがヤッタほうがいいから」とニヤリ。

■ 近未来建築

今、合理的なことばかり考えていてはダメなのです。例えば「鳥の巣」は、鉄にお金を使いすぎていて、合理的とはいえない建築物。しかしそれを捉えて、評価はできない。北京のシンボルとして成功している、不合理な近未来建築の一つなのです。

「アトリエ事務所の危機だと思っている。組織の技術レベルが格段に高くなっているし、エンジニアもデザイナーも、何人か注目できる人がいるしね」。誰なのか気になります。

公共のコンペも激減している。アトリエは住宅から再スタートして、ハウスメーカーの独占を考えていくべき時では？と警鐘を鳴らす。「だからこそ、私はコールテン鋼を使うのです。100年以上メンテナンスフリーでもつのですよ！」。

